

学習用パンフ No. 3

なにからはじめるべきか

発行

『プロレタリア通信』編集委員会

一九八八年五月十五日

巻頭の記

ロシア・ソビエト革命から七〇年、世界の三分の一は非資本主義化した。しかし、いまだ世界は数ヶ国の一握りの金融資本に支配抑圧されつづけている。意識的に資本主義から離脱した諸国もいやおうなく工業化の道を歩み、新たな矛盾と差別を生み出している。世界はいまもって全面的に破壊されつくされなければならず、世界は被支配階級人民、被差別大衆によってつくりかえられなければならない。圧倒的多数の人民によって創造され建設される世界でなければならない。

レーガンや中曽根が何を主張しどんな政策を提起しようと、怒れる人民大衆は世界のいたるところで反乱し抵抗しつづけている。資本の世界性と国際性に対する人民大衆の国際主義は、目的的な意志的な自国帝国主義打倒であ

り、世界の闘う人民大衆との具体的實際的連帯である。

われわれ『プロレタリア通信』編集委員会は、日本の世界の實際闘っている人民大衆に依拠した運動と理論をつくりあげること心がけている。とりわけ、日本の先進的闘いの歴史をまず自からのものとして血肉化し、英雄主義・自己犠牲の精神を悲壮な決意としてではなく、おおらかさと優しさのうちに獲得しようとするものである。

『プロレタリア通信』編集委員会は、以上の幾つかの視点のもとに学習用パンフレットを随時刊行する。

『プロレタリア通信』編集委員会

一九八六年三月三十一日

三 次

高 橋 崇

なにかからはじめるべきか

序

第一章 思想・哲学の改造―世界観の獲得について

第二章 党建設の方法

A 人の要素・作風―街頭闘争主義について

B 労働組合主義と街頭闘争について

― 革命的政治とは何か ―

C われわれの段階―結束した党建設について

第三章 われわれの政治について

党派政治と全国政治について

組織方針・規約の実現について (略)

P	P	P	P	P	P
35	28	23	16	4	1
35	35	28	23	12	4

序

党建設における基本問題とは、一言で綱領と規約に忠実でなければならぬと言ふことである。しかも、統一・共闘、連合などとして党的団結をかちとるのでない以上、何処までも個人の思想的堅固さによるのでなければならぬ。どんなに理論的にすぐれていようと、どんなに立派な思想を開陳する人物であっても、その人物の私生活が乱れている以上同盟し団結することは不可能だ。つまり、ブルジョア個人主義、ブルジョア自由主義は革命党になじまないのである。なぜなら、世界観と人生観を分離したり、つかいわけするよ

うな人物には計画を実行する決意を根本的に

欠落させているからにはかならない。

職場や工場、地域で労働者や市民は、その人の思想や理論のみを評価しているのではなく文字通り、その人の倫理観をもみているのである。プロレタリア的倫理観を喪失した共産主義者が闘争の一時的局面で指導的役割を荷うことがあっても永続的に人民大衆に信頼されることはあり得ないであろう。かかる意味において、われわれは人民大衆とともに進みながら一歩先んじた思想性をわがものとしておかねばならない。だがしかし、われわれの積極性、能動性は優越意識とは根本的に異なる。単なる優越意識は差別意識にはかならないからである。

ブルジョワ個人主義、ブルジョワ自由主義

の同盟への流入と闘争することは、自己の曖昧さとの闘争であり自己をプロレタリア規律で律することである。自己のプチブル思想との不断の闘争なくして鍛えられた不拔の共産主義者、ブント主義者を形成することはできないであろう。

われわれは何処からどのように党を建設しようとしているのか。党建設上の政治組織路線とは何であり、どのようなものでなければならぬか、を議論しようとしている。「総括・情勢分析・政治方針・組織方針」と言っただような民主主義諸闘争団体の年次大会報告書をつくろうとしているのではない。また、個別理論問題（スターリン批判や世界革命論）をそれ自身として扱うわけにはゆかない。言い換えれば、われわれの立場性、立脚点をどこにどう定めるのかということにはかならない。したがって、新左翼三〇年の歴史のなか

ってその指導部は互壊したのであった。本格的党建設に失敗した。本格的党建設とは、この独占資本主義体制を打倒するアレコレの方策ではなく万年危機論、街頭主義からの一大飛躍である。このことは、反戦青年委員会や大学自治会指導 すなわち党建設と言った水準、または一面化からの飛躍である。マルクス主義者形成の契機は確かに大衆運動を通じること、大衆運動こそ工業化された指導部—カードルの形成であるにちがいない。しかし、自覚的なマルクス主義者、哲学するマルクス主義者、必要とあらばすすんで孤独を愛するマルクス主義者を形成するのは運動と全く別次元でなされなければならない。ブルジョアジーの旗であった「自由・平等・博愛」は、この二百年間、抑圧と搾取と支配・差別の代名詞となっている。それ故、民主主義諸闘争、大衆闘争における自然発生性は、目的意識性の萌芽だと

で、われわれが反スターリン陣営であり、世界革命主義者であり、武装闘争派であることはあまりにも自明のことである。とはいえこの三〇年間に、わが陣営に入り込み、われわれの立場性・立脚点を掘り崩そうとするあらゆる試みと諸傾向に対して厳しくこれと党派闘争を展開しなければならぬであろう。

当面の課題、第一になしとげなければならぬのは構造改革理論、路線である。われわれにとつて構革派は右でありつづけてきた。ブントは、万年危機論、武装蜂起主義者、街頭主義者、大衆運動主義者などと名誉ある俗称をもらっていた。ブントはなによりも世界革命主義者としてかかる俗称を恐れることなく自己のものとしてきたのである。しかし、六〇年新安保闘争時には六〇年四月にその前衛としての党建設に失敗し、七〇年安保・沖縄闘争時にも六九年四・二八破防法弾圧によ

われるのである。目的意識性、マルクス主義者の形成は、疑いもなく党に組織されなければならない。このことを踏まえて前衛党指導部は形成されなければならない。下が一度に渡って問われた本格的党建設の質とは以上のようなものである。（『戦後革命運動から何を学ぶか』を参照のこと）

構造改革派批判とは、かかるブントの間わられた質にたいえることなく「仲間さえ増えれば良い」という傾向を許してきたわれわれ自身政治活動の狭さを自省しつつなされるのである。労働党、マル青同、プロ革赤軍派などおしなべて社会民主主義化・社会排外主義手前まで進んでいる。彼らは「平和・愛国」「ファシズム反対、救国」などのスローガンの下に活動している始末である。しかし、ここの対象は構革派である。共産主義者同盟の名のもとに構革派にすりよっていった多く

の同志諸君にブント魂を甦がえらせなければならぬ。赫旗派を構成した諸分派にはかならない。彼らは「新左翼の終焉」「社・共にかわる単一党」なるスローガンを挙げ、一世を風靡したかみにえた。彼らは、質を抜きにした量に、その量とは表から表を見わたしているにすぎない。これは明らかに武装闘争の清算である。われわれは彼らと根本的に世界観を異にしているであらう。

構造改革派的体質を徹底的に解体・粉碎せよ！

第一章 思想・哲学の改造

世界観の獲得について

世界史像、または世界精神（ヘーゲル歴史哲学）と言わず、なぜ世界観なのか。それは以下のとおりである。

われわれは、一般知識として、情勢として

この地球を認識しなければならないことを主張しているのではない。むしろ、われわれの能動性について述べようとしているのだ。ひとつには、歴史観—どのような時代に生きているのか、どのような地点に立っているのか、言い換えれば、人間としての存在のあり方、態度、したがって世界を創造する実践的理念、人間の主体性に関わる問題である。自省、内省を原動力とする革命的人間の形成にほかならない。従来の組織の団結の質を根本的につくり変えることを目的としている。

なぜブントは分裂してきたのか。その原因は多岐に渡っている。そこで抽象概念・理念に関してはおいおい展開することとして、まず一般論としてブントのイメージを素描する。ブントに対して、学生とか、地方主義、連合主義と言ったことがすぐ頭にうかぶはずである。あるいは、赤ヘルメット、ゲバ棒、そ

して爆弾闘争や赤軍派、さらに、革共同三派

の根クラに対する根アカと言ったことが思い浮かぶに違いない。とにかく、ブントは組織問題、組織にはダメだが現場主義で大衆的運動主義だと言ったイメージではないだろうか。

換言すれば、ブントとは党派たらんとする個人主義、個性の強い連中の集まり、一匹狼の集団と言うにふさわしい連合組織、しかも学生を中心としたのである。

われわれは、ブントの良い面として大衆闘争主義や根アカや強い個性の集まりなどを尊重し継承するものである。それとてあるがままのブント主義であってはならない。学生中心主義や連合主義、地方分権主義と言った組織に弱いと言われた負の側面を克服することによってブント主義は再生されなければならない。われわれはブントであってブントでないことを確認することによって新たにブント

主義の再生を目指すのである。

マルクスはイギリス経済学とドイツ哲学を古典とまで称賛した。なぜか、ヘーゲルにとって神とは宇宙空間を意味し宇宙はまた絶対理性として自己を発展させる。その発展とは自然であり、イブーとしての意識である。このことは同時に人間によって意識され自覚されるどころの精神でもある。つまり、ヘーゲル哲学は、イブーとしては全世界を矛盾的同一として扱えられるところの論理体系である。カント哲学の場合は形而上学を批判するあまり経験や直観を類的人間（超個人）の主観におきかえた。そしてこの世界に現象する以外のもの、すなわち見えないもの、見えない精神・非経験を不可知なものとしたのである。ヘーゲルはこうしたカント哲学のいわば不十分性をすてさったのであった。

マルクスはこうしたドイツ哲学の世界観か

ら独自の世界観をうみ出したのである。マルクスのこの間の事情については『経済学批判序説と序言』を繰り返し読むことである。マルクス自身がヘーゲル弁証法をどのように批判的に摂取したかを説明している。

われわれは「序説の方法」と「序言の唯物史観の公式」を確認するところから出発しなければならぬ。

われわれの立脚点、立場とはマルクス主義の哲学的再興であり、ブント主義である。

共産主義的意識への覚醒、その契機は千差万別であることを確認する。しかし、そこからのマルクス主義者への目的意識的な形成は、極めて能動的主体的な実践的に哲学する人間の形成でなければならぬ。党の立脚点、党派の立場性は、政治方針にのみ求められるのではなく、如何に具体的実践のうちに日常を变革しうるかにかかっている。それは単に変

革対象の分析・評論に止まるものではなく自己変革・変革主体の革命としてマルクス主義を獲得することではなければならない。自己の变革を求めず対象の变革のみを要求するのは、ない物ねだりをする子供のダダみたいなものである。

われわれはブントであった。いまもどうしようもなくブントである。しかし、このブントをトコトン自己否定的に克服することなしに二度も失敗した党建設に新たに挑戦することはできない。しかも、「ブントであった」と言っても、そのブントの歴史が示すとおり、十把ひとからげではないが何十派にも分裂した。そのような「ブント」から、ブントたらんとしているのである。これまで「人の要素」（第一回同盟総会での議論）としてきた内容からの飛躍が問われている。これにこたえるものこそ立脚点・立場の形成である。その端

初こそがマルクス主義的世界観の獲得である。本格的党建設とは、われわれを世界党たらしめることであり、「武装闘争から議会闘争」までのあらゆる民主主義的諸闘争を指導し抜く党であることである。武装闘争をやり抜く、武装闘争を指導する組織の建設。それでもってはじめに本格的党建設と言いうるのである。

いまや世界は資本主義的生産様式を抜きに考えられず生産力はこの数十年の間に爆発的に発展した。たしかに世界は、非資本主義的要素としての農林漁業などを包みこみ、非資本主義的諸国たるいわゆる第三世界と「社会主義」をもって成りたっている。だがこうした要素や諸国も資本主義的生産様式を受け入れるのみならず、わずか数ヶ国の金融独占資本主義の世界体制に組みこまれて久しい。資本主義的生産様式は人間関係を最もわかりやすい関係、支配と被支配、搾取階級と被搾取

階級に階級対立を単純化しただけではない。生産し分配し消費する関係を統一市場として創出し国内を支配するのみならず地球のすみずみまでも支配しないではおかない。ここに、歴史上かつてなかった生産力をつくりだしたのが資本主義である。つまり、資本主義における人間関係とは生産関係すなわち資本家と労働者という階級関係に単純化したことである。しかも、資本主義は本来商品たりえない物まで商品化することによって、生産手段を資本家の占有物にする。したがって資本主義社会における生産とはすべからず商品の生産である。こうして、人間と人間の関係さえ物と物の関係としてたち現われ、資本家と労働者という法的な契約ごととして労働力の売買が成り立つのである。ことばをかえて言えば、これは、物（資本）の物神性ということができるであろう。繰り返すと、生産手段

の私的占有によって生産は、それぞれ無政府的に生産されるのみならず、あらゆるものが商品化・資本化されることを意味し、たとえ人間であっても例外ではあり得ないということにはほかならない。マルクス言うところの物神崇拜とは、資本それ自身が人間に対する支配力をもつこと、資本とは、超自然的力をもつものという意味であろう。

だがしかし、資本主義社会を生みつくり出したのは、ひとり資本家階級のみではない。また、高度に発展した工業化社会としてのこの金融資本主義が不変永久などではない。これまでの歴史がそうであったように人民によってつくり変えられる運命にある。とりわけこの資本主義世界は、労働者階級によって発展させられてきていることを考えると労働者階級をはじめとする人民の反乱によって一朝にして崩壊する運命にある。しかも今日では、

金融独占Ⅱ帝国主義に支配・抑圧されている非資本主義諸国人民の決起、民族解放闘争によっても互壊の可能性をもっている。人間関係Ⅱ階級関係を単純にしたということは、それだけ階級闘争も単純にしたということにはかならない。たしかに支配の論理は巧妙になり、人々の意識を保守化するイデオロギーと技術は発達してきている。人間は「貧しても鈍する」ことがあり、何不自由ないと思いつつ生活によっても保守化する。

世界資本主義（帝国主義）はソ連邦一国を包囲し圧力をかけ、スキあらば攻め込む方針を変えたわけではない。しかし、一九四五年以降、とりわけ中華人民共和国の成立（一九四八年）にともなう、ヴェトナム、キューバのあいつぐ解放によって、むしろいかに世界市場に組み込むか、近年、中国それ自身の方針転換とあいまって、この傾向は強まってい

る。にもかかわらず、世界資本主義の危機は深刻な局面に向いつつある。第一に生産の無政府性は競争の無政府性を意味しダンピング合戦は保護主義を抬頭させずにはおかない。世界資本主義における分業・水平貿易が計画されるなど予測することはとでもできず、相互市場の争奪はより熾烈に、より深刻になるであろう。かと言ってブロック化・共同市場・共同体化が何の矛盾もなく進行するとも考えられない。ECが比較的成功しているかに見えるとしても、それは、中近東、アフリカを植民地に行っているからにはかならず、なによりも社会民主主義・社会民主党をはじめとする社会排外主義者による保守主義に助けられているからにはかならない。第二に、世界資本主義の最大の信用制度たらしめてきたドル・ポンド体制の崩壊である。ドルの兌換制度の廃止と変動相場制の導入によって、かろうじてIMFは維持され

ている。い、金融恐慌がどこで起っても不思議でない。Ⅱ客観的危機は成熟している。第三に被植民地におけるナショナルな運動の展開が資本のイ・タリシヨナルに対抗して登場してきており、民族解放闘争と運動してきている。いわば民主主義闘争として都市蜂起があり、農林漁村、鉱山における先住民民族解放闘争との結合が韓国、南アフリカ共和国やフィリピンなどにみられるごとくいわゆるベトナム型でない要求と闘争がある、中南米、南アメリカ諸国における独裁打倒の闘争など、いずれも資本主義（帝国主義）の危機を示してあまりあるものである。

第四に、世界資本主義の危機、それはいうまでもなく、一九六〇年代以降全世界に散在する新左翼の存在である。日本、ドイツ、フランスにはじまる新左翼は、六〇年代中期、黒人解放闘争とベトナム反戦闘争を通じて、

いわゆるスチュエーデントパワーとして昂揚した。北アメリカ（帝国主義）における新たな左翼の登場である。これら左翼は、いまだ十分な連帯、団結、相互交流さえもちえていない。その力量でさえ決定的に欠けている。しかし、被植民地における解放闘争と帝国主義足下にある左翼相互の連帯ががちとれるとしたら文字通り世界革命は夢でなく現実のものとなるであろう。世界資本主義にとっての危機、それはいうまでもなく世界革命の現実性である。

ここに、われわれが存在している歴史的位置がある！！

ここから一定の結論は導ひかれる。プロレタリア国際主義の内実がである。世界党の現実的実践的根拠は現に存在している。被抑圧民族の解放と万国のプロレタリアの団結！！これである。

ところで次のような世界認識にもとづく諸実践Ⅱ主体形成はトコトン反動的なものである。

「戦後の米ソ支配体制」「戦後のヤルタ・ポツダム体制」、これらはいずれも体制間矛盾論である。日本共産党から黒田實一（「米・ソの相互依存相互反発」）にいたるまで、多かれ少なかれかかる傾向にある。たしかに、第二次帝国主義全面総力戦争の終結時に、北米、英、ソ連邦は、地球の版図をそれぞれの勢力範囲に分割した。しかし、この分割は単に現象であるにすぎない。本質的に世界のプロレタリア及び民族の圧倒的多数はとりわけ、その生産力において資本主義に支配されている。また、われわれは、ソビエトに反対するのではなく、スターリン主義・一党社会主義に反対するのでなければならず、単に「米・ソ超大国」に反対なのではない。むしろ、大国主義的イデオロギーとその具体的支配

に反対なのであり、その限りで体制に反対なのだ。しかも、スターリン主義反対とは、外的に批判・打倒するのではない。「Y・P体制打破・日本主義の復興」でも、「Y・P体制打破・世界革命」でも断じてない。戦後処理過程が「米・ソに委ねられたから不満だ」このような論理は超階級的であり、超反動的なしろもの、民族主義的しろものでしかないであろう。われわれが打倒しなければならぬのは、目の前にいる資本家であり、階級国家である。なかんづく、世界資本主義でなければならぬ。そのことによって、ソ連圏と問わず、いわゆる一国社会主義をその社会から根底的に変革することではなければならない。スターリン主義という党・軍の官僚を打倒すれば事足りるのではなく、国内少数民族問題をはじめ、生産・分配・消費にいたる全社会的変革なしには、今日の一国のまたは数ヶ国

の「社会主義」の専断はあり得ない。国家の、権力構造のありさまによるような革命ではない。したがって、われは、革命を意志する「社会主義」国における労働者、農民をはじめとする人民自身の事業でなければならぬのである。「かかる意味において「米・ソ超大国の支配打破」というスローガンがいかに観念的なものであるかわかるかというものである。資本主義的帝国主義ほど侵略・抑圧国家はない。資本主義的帝国主義における被支配階級たる労働者人民は抑圧民族である。帝国主義国における労働者人民は歴史上たぐいまれな抑圧民族として近隣諸国人民を抑圧しその資産と文化を略奪している。労働者人民は資本家の片棒をかついでいるだけではない。むしろその積極的な先兵とさえなっている。それは、今日の資本主義的生産関係と生産力を維持し自からの生活水準を維持せんがた

めに意識的な社会排外主義に転化している。これが世界の社会民主主義運動であり労働組合運動である。それ故、われわれは、スターリン主義打倒も社会民主主義粉砕も単に外在的なものとしてではなくあくまでも内在的なものとして措定しなければならないのである。

ここに我々の実践、世界革命と世界党建設を措定しなければならないのだ！

第二章 党建設の方法・路線について

A 人の要素・作風

街頭闘争主義について

われわれの組織活動はほんの今はじまったばかりである。

われわれはこの二十数年間の活動、政治生活を反省し徹底的に歴史の唯物論的把握に立脚し唯物史観をわがものとするところから出

発しようとしている。われわれの歴史がいかに主観的観念にのみとらわれていたか、その反省にたつて世界史を再把握しつくさなければならぬ。いいかえればマルクス主義の再興であり、われわれのマルクス主義の獲得である。

われわれの「党」はいまだ文字通り「連合」である。もしこの現状にあまんじているなら、永久に「連合」であり、党をめざすグループであり、準備会にすぎないであろう。個人個人が日常に緊張をもちこみ、自から変革しようとし、団結に対しても意識的な働きかけをもちこまなければ党としての質を獲得できないのではないか。党的団結、それには一定の量が必要である。しかし決定的には、世界革命を意志する人間の質であり、人間と人間のゆるぎない連帯・団結にほかならないであろう。もっとありていに述べればお互いにお互

いを防衛しあえるかどうか、お互いを尊重し合えるかどうかにかかっており、なおかつ相互に主体的に責任をわかち合うことである。「言いばなし、やりばなし」の体質、連合的体質、一匹狼的体質、あるいはお山の大将的体質、囲い込みと親分・子分的な一切の体質の一掃である。こうしたブント主義ブント的体質を一掃しつくすこと抜きにはマルクス主義的人間の形成と秘密結社にいたる党的団結はかちとれないであろう。

われわれはブントでありつづけながら、なおブント的なもののあらゆる悪しき体質、伝統をトコトン否定しつくすことでなければならぬ。そのことによってはじめてブントは再生されるのである。

われわれはブントのアレコレに固執することなく全く新たにブントを甦らせるのである。だからと言って「新左翼の終焉」とか「社・

共にかわる単一党」などをスローガンにするものではない。このことを何十回となく自問自答し繰り返し自省しつつ党建設にまいしんするのでなければならぬ。したがって、ブントの蘇生を賭けて「組織論序説」ともいべき内容を提起しているのである。それ故、党の行動綱領と規約をわがものとするとき、この政治組織路線を自からの活動の思想的立脚点としなければならぬのである。

かつてブントに入党するには、その人生を決定的に左右するような重大事と考えていた人間は少数ではなかったか。その人間のあり様、その人間の生活、その人間の人生そのものを決定することを決意したものはいかたであろうか。根底的な価値の転換を自覚したお人民の子として生活を意志したであろうか。大衆闘争のゆきがかかり上入党したり、先輩・後輩の関係であったり、あるいは誘う方も運

動のヘゲモニーのためや票数のためにと言った力学優先ではなかったか。そこには人間変革の思想、変革対象以前の問題として人間の問題がどれほど自覚されていたであろうか。それらは政治方針によって説得したり、されたりといった内容であり、教育したりされたりといった原則、マルクス主義的人間の形成にはほど遠いあり方ではなかったか。目的意識性への契機、共産主義への契機、ブントのブントたらんとする契機、それらへの接近は、人それぞれであり千差万別であろう。しかしブントの場合その多くは学生であり大衆闘争を契機としていたことは疑いない。なおかつそのブントはいずれも故年をへずして分裂した。思想の組織の人格的継承性は非連続としてこの二十数年間の歴史である。

また、ブントは、学生だったから、急進主義だったから分裂したのではない。学生共産

してのみ始まり終るような、そして運動のみの指導は間違いである。学生を層として永続的に運動を指導するとは言え革命家の形成は全く独自の政策、指導でなければならぬ。その基本は労働者革命家となることを内容とする指導でなければならぬ。学生はプチブルである。学生の将来はその多くが賃金奴隷となる運命にある。しかし学生は若く情熱的である。そのエネルギーは爆発的である。われわれの共産主義革命は青年の決起なくしてあり得ない。学生と青年労働者の情熱、エネルギーその爆発こそ革命の原動力でなければならぬであろう。学生と青年労働者には限りない未来がある。世界革命・世界共同体と云う未来である。

新左翼 II ブントにおける党建設は一言で表現すれば街頭主義ということができる。そして革共同とブントの違いは哲学

主義者を一個の主義者へ、プロレタリア革命家に形成する内容そのものをもち得ていなかったことにある。指導の分裂はその時間と質を奪ってきたとも言えることができるが根本的には「情勢分析・政治方針」と言う哲学の貧困にこそあった。学生共産主義者を自覚的な労働者革命家と職業革命家に形成する指導の質をそもそも持ち合せていなかったのがブントであった。組織のあり方、組織経営の計画はもちろんだが誰がどのような立場で仮設をたてるのかという実践にとって不可決の主体を抜きに政治方針が党派性となるのはあまりにも不自然であり不合理である。かかる意味においてはブントの分裂とは必然性をもっている。

労働者革命家と職業革命家の形成、このことに留意して組織を経営しなかり党は建設できないであろう。学生を層と把え、層と

にあったと。ブントは個人個人それぞれがバラバラに世界観を有しており、とりわけ指導者は自己の哲学を普遍化することなく政治方針や情勢分析をその都度提起した。その単的な表れが第六回大会後の『戦旗』に数回にわたって掲載された「思想の党か戦略戦術の党か」と言う表現でありスローガンである。ブントは「戦略戦術の党」で革共同は「思想の党」だと言うわけである。思想や哲学なくして戦略戦術をそもそも提出できるわけがないではないか。思想のない党があり得ないと同じに戦略戦術のない党などもあり得ないであろう。しかし真面目に機関紙にスローガン化されたほどにブントとは思想を軽視してきたのである。ブントとはそのような思想水準の集団であったということができるとしての党、思想を普遍化することを組織と

する党建設の路線があるわけだ!! ブントには政治方針それ自身があらゆる意味での方針であった。この違いこそ、この三〇年間に表れたブントと革共同の差だと言うことができ。また、こうしたブントの誤り、組織の間に立ち現われたのが日向翔である。日向と日向派を形成した今日の戦旗派の諸分派は、あの六九年秋の「安保決戦」から逃亡した。とりわけあの時代は、武装闘争がひとつの時代を形づくったのであった。こうした時代にあつて、日向翔は明らかに武装闘争反対派として登場したのである。現在戦旗派を自称する戦旗諸分派の活動家のごとくは、かつてのブントの方針であつた「恒常的武装闘争論」爆弾闘争から逃亡した。あまつさえ大衆的実力闘争・羽田・蒲田駅頭でのゲバ棒闘争からさえ逃亡したのが、当時の「情況・叛旗」派ではなく、ほかならぬ、現在の戦旗諸分派

このことは職業革命家群と現場活動家群との対立、または組合主義と街頭主義の対立と言うこともできる。

この歴史はブントのみに特有のものでないかも知れない。しかも革命運動にとって永遠のテーマとなるであろう。

ただブントにあつてはあまりにも顕著に露骨にあらわれたにすぎない。

ブントは労働者を組織できなかったばかりではない。本質的には学生さえ組織できなかったと言うべきである。何となれば、学生を労働者革命家へと形成できなかったのであり、マルクス主義的人間として労働者、学生を組織できなかったのだ。このことは、政治路線で統合すると言うようなものでは断じてない。たしかに客観的にも主体的にも革命的危機が存在し、とりわけ支配階級がその権力を投捨てようとしている時代には全人民を決起させる

である。しかし、彼らが今日いわゆる新左翼の世界のなかで一定の政治勢力たり得ている事実を謙虚に受けとめねばならない。それは彼らが単に六九年安保・沖繩闘争、なかんずく武闘争を日和したことによるのみではない。やはり、ブントの分裂過程で一定の説得力をもちえていたからにはかならないであろう。だがしかし、あの時代、爆弾闘争が社会の風景とさえなったあの時代に逃亡したととひきかえに今日の戦旗諸分派が存在していることは疑いようのない事実なのである。

B 労働者主義と街頭闘争主義について

— 革命的政治とは何か —

ブントの歴史。ある意味では労働者、労働組合活動家、労働組合活動家同盟員と学生生活家の対立の歴史と言ってもよいであろう。

政治路線、政治方針、政治スローガン、または、それらをテーゼとして革命党は提起し自から荷うであろう。ブントは危機論を革命論の基軸にすえ、政治、すなわち権力、国家の問題をストレートな形で提起しつづけてきた。戦後の一時期を除いて日本に革命的危機は存在してこなかったのではないか。そして、日本の労働者階級は、社会民主主義に指導され、労働組合は反共民主化同盟を母体とする総評と同盟によって組織されてきた。この日本における社民と民同の改良主義、組合主義に対して、第二次共産主義者同盟は、全人民政治闘争・革命的政治を対置し日本帝国主義の軍事外交路線（日帝の膨脹主義）に対決することを訴えてきた。ここに、ブント再建第六回大会路線の「生活と権利の防衛」路線にかわる第七回大会路線があつた。こうして、その組織方針に反帝戦略部隊論が打撃部隊論（六

回大会派)にかわって提起され反帝戦線(A I F)、社学同の廃止と共産主義青年同盟

(キム)の結成がちとられてゆくののである。

労働組合主義に対する革命的政治闘争は、労働運動においては、「マッセンスト・ソヴエト運動」階級的労働運動」として主張され六九年秋、東京と大阪において拠点工場、職場でバリケード闘争がたたかわれた。一方この全人民政治闘争・革命的政治の展開は、「中央権力闘争・霞ヶ関占拠」、あるいは防衛力闘争(六八年のエンブラから六八年十・二一闘争)としてたたかわれ、ついに、革命戦争(赤軍派)、恒常的武装闘争(連合派)といった極点に達するのである。

われわれは、冒頭「組合主義と政治主義」というごく単純な図式で問題をたてた。しかしながら、わがブントの歴史において単に二者択一の問題ではなく、あくまでも共産主

義者と社会民主主義者との違い、反共民同に対して共産主義的立場からプロレタリア政治とは何かを訴えてきたのだ。そこでは「労働者主義と街頭主義」としてのみあるのではない。一切の核心は、労働者が自己解放に向けて、革命的政治を如何に現場で展開しうるかにある。そうすることによってマルクス・レーニン主義は多数派となるのである。

第二次共産主義者同盟の武装闘争諸分派と日本共産党革命左派をはじめとするあのひとつの時代を形成した武装闘争派は、革命的政治をそれなりに貫徹した。この貫徹は、同時に社民と民同を突き崩すまでにいたらず、むしろ、武装闘争が突き当たった厚い壁なのである。それ故、われわれは、あらためて、革命的政治の内容として、資本主義批判を通じた綱領獲得に向ったのであり、本格的党建設として非合法党建設に向ったのである。それが、

七〇年十二・十八ブントであり、七一年四・二八蜂起・戦争三派集会であったのである。

たしかに、全人民の政治、革命的政治とは、権力・国家の問題であることに疑いをさしはさまない。にもかかわらず、われわれが突きあたった壁とは、資本主義をその根源において批判しつくすことであった。それと同時に労働者運動をそれ自身として組織することである。このことは単に「人民の海なくして非合法なし。これ真理である」(仏徳二)といった技術論的なものではない。戦術的には、政治警察とのたたかいは重要である。だが、戦略的にはより本質的意味において人民一般ではなく市民社会(ブルジョワ社会)批判をもってする階級闘争の論理であり、運動でなければならぬ。

以上の観点からブントの歴史を簡単に見ておく、そして、労働者主義と街頭主義につい

てわれわれの見解を述べておきたい。そうすることによってわれわれの歴史的地平を明らかにする。六〇年安保闘争の後に、七〇年安保・沖繩闘争の後にも三つの思想傾向が生まれた。社青同的な労働者主義、すなわち構造改良的な傾向を帯びつつ自主管理や評議会主義的傾向である。第二に毛沢東思想を無媒介に受け入れ人民の中へ武装解除しつつ総退却するか唯武器主義への傾向である。そして第三に「命令と合言葉主義」とも言うべき革共同主義の受け入れと組織戦術論による党派主義の傾向である。

ブントの街頭闘争主義は本質的にはソビエト主義・武装蜂起主義である。われわれのプロレタリア独裁は、労働者階級をはじめとする人民による多数派の権力である。しかしこの理念は六〇年にあっても七〇年にあっても「総評のゼネスト」のよびかけとともに学生

のスローガンであった。真に労働者の自己解放に向けたスローガンとなり得なかった。こうして、労働者人民に対する一方的な期待は裏切られ労働者同盟員と学生共産主義者の異和感は拡大した。

たしかに労働組合は労働者の生活改善の目的で結成されてきた。今日では、経済闘争のみならず労働法などの改良や反戦闘争なども組織されてきた。しかしながら、政治的訓練には一定の目的意識的な指導がなければならぬ。そのような実践の場として日常的には街頭闘争があるであろう。かつては、これを改良主義に対して革命的政治とよばれたのである。

組合主義は経済闘争と政治闘争とを区別し労働者の直接の経済的利益の獲得に労働組合の活動を限定する主義である。このような主義は社会民主主義諸政党の指導による労働組

合である。

階級的労働運動とは自己解放運動であり社会主義を要求する運動である。このことをやさしく説明すれば、政治闘争をたたかうことであり権利闘争をたたかうことである。権利とは、「支配・抑圧・差別」に対して人間としての尊厳を奪いかえすことであり、他を支配・抑圧・差別しないためにたたかうことにはかならないであろう。つまり、労働者人民の正義である。これが権利である。したがって、労働者人民にとっての権利とは、奪われた国家をさし当って奪いかえす権利であり、人民の革命権である。それ故、当然にも帝国主義的あらゆる戦争政策に反対すると同時に自からの解放を賭けた戦争を組織する権利だ。

階級的労働運動とは、ソビエト主義、武装蜂起にいたる人民の武装を組織する運動のこと、自からを権力たらしめる武装せる運

動のことにはかならない。それらが工場や職場でのみ可能なはずもなくあらゆる機会において組織すること、とりわけ、街頭において組織されること、言いかえれば「外からもちこむ」ことによつてより意識化されるのである。

だが現実には労働組合活動と政治運動・闘争の間には多くの矛盾・困難がある。この矛盾を無理して統一することはできない。むしろ組織のうちに組織として統一すること以外にないであろう。ブントの街頭主義と労働者活動家の分裂とはこの困難な仕事に敗北した結果である。ブントは権力による弾圧にも敗北した。しかしより内的には、自供や財政問題、救援と言った仕事を正当に評価してこなかったところに原因があり、労働者革命家を鍛えることに失敗してきたことにある。つまりは内部崩壊としての分裂であった。外から

の圧力に敗れたのみならず、その多くの原因はブント自からの精神の脆弱性にゆらいずる。ブントは、マゴウことなく内部崩壊したのだ。

われわれはブントでありつづける以上街頭闘争の路線を踏襲する。街頭闘争路線とは大衆的実力闘争のことであり議会主義と異なる人民総決起の路線のことである。各種議会闘争を無視するのではなく人民の抵抗権を議会に限定する既成の諸政党に反対である。しかも、大衆的な実力闘争にさえ、われわれのたかいは限定されない。現段階においては革命の型を分類・固定化しない。たとえば、グラムシのように「機動戦と陣地戦」といった具合にある。または、「人民戦争」ポーン・ザップ將軍、「都市ゲリラ」マリゲラといったようにである。われわれの理念、われわれの目的、目標はあくまで原則であつて、

その実現の方法・手段について現段階においては、自己の手足を縛るような型を決定しない。

むしろ、われわれは、自からのたたかいかいにおいて、如何に闘争の典型をつくり出し得るのか。日本帝国主義足下において、日本の労働者人民にあった仕方をどうつくり出してゆけるのか。すくなくともこの日本における共産主義運動の数十年間の分析・総括と合せて自からのたたかいを精力的に能動的につくり出すことによつてその典型を、モデルを定着させ理論化してゆかねばならないであろう。われわれのこの二十数年間の経験によれば、あの六〇年と七〇年の闘争であり、六九年からはじまる都市ゲリラこそ、ひとつの典型をなすものである。このような典型それ自身をいまもって誤りだとは考えていない。ここで問題にしているのは、このような典型は労働

それなりにひとつの典型をつくり出してきている。そして党派性をなしている。

われわれは、労働者主義（組合主義）と街頭主義の矛盾を転回軸としてダイナミックな革命運動と党建設に邁進するのでなければならぬであろう。党建設、共産主義革命を目的としない街頭主義は単なるラジカリズム、あるいはブランキズムへの道であり、労働者主義も戦闘的組合主義か、よくてサンジカリズムへの転落以外にないであろう。勿論、あの幸徳秋水や大須・荒畑などを想像することはできないの言うまでもない。かかる意味では主義者と言うほどの労働者主義は今日では考えられないのである。論者は数アマタいるとしてもある。資本主義諸国におけるこの数十年の歴史はそのことを良く物語っている。

われわれは、わが共産主義者同盟の革命的

者の圧倒的多数の決起のうちに生み出されたのではなかったと言うことである。労働者が資本のくびきからときはなされ、国家を真近に見すえることを、そして自からを社会の主体たらしめることをなし得ずしてはいずれ、われわれの目的は達成されないのである。否、労働者の目的とならなければならぬ。自からをその手段たらしめる意志にまで労働者の覚醒がなければならぬ。それには、組織・前衛の媒介、手助けがないかぎり不可能であり、工場や職場のみでも不可能である。ここに革命的な政治としての街頭闘争の意義があるであろう。繰り返すが街頭闘争がすべてだと言っているのではない。ブントは、「左か右か」式に街頭闘争以外に見えなくなってきた。問われているのは、労働者がどうたたかいた典型をつくり出すかにかかっている。少なくとも「名のある党派」は労働者運動において

政治を発展的に継承するものである。

C 我々の現段階

われわれは、行動綱領と規約、諸課題に対する決議、スローガンをもって同盟した。

この一年間を顧みる前に、この一個のフラクションになる数年間をあとづけ、我々の団結がひとつの必然性をもっていたことをまづもって確認したい。

出合いそれ自身は多くの偶然性の積み重ねではあったが、しかし、それぞれが労働者人民の将来に対して烈々たる想いをもって活動していた。そして、幾人かが幾つかのサークルにまたがりながら活動していた。ポールの下の階級闘争の研究、共産主義者同盟の分裂の歴史に対する研究、今日の労働組合、労働者運動に対する研究など、ときにはそれらは

「共産主義者協議会」の名において議論してきた。こうした集まりにひとつの区切りをつけるべく、また自からの活動と思想性をより根本的に哲学するものとして共産主義者同盟は結成されたのである。いうまでもなくこの同盟は生まれたばかりであり、それぞれがまだまだ十分に全体重を賭けた同盟とはなり得ていない。

その理由をいくつかあげることができである。あろうが本質的には、指導部が指導部と自覚すること、カードルがカードルと自覚すること、この点でたちおくられている。このことをありていに分析すれば、第一にわれわれはこの十数年間の左翼の敗北にとらわれている。自からの生き方を問いつつようやくスタートラインに立とうとしているのが現状ではないか。しかも、第二に敗北・坐折のあらわれかた、坐折のありようも人それぞれであり、時

代の共有性は必ずしも内容の共有をいまだ意味していない。

一九八六年以降、国鉄労働者を中心とするサークル、三里塚闘争、反天皇、沖繩解放闘争など運動によつては部分的に新たな段階、ひとつの密集したグループ活動が展開されてきた。八六年までの研究会などを軸とした人間関係は、運動によつてひとつの展開を開始したのである。さらに、それぞれが独自の現場をもち活動を始めている。かかる意味においてはこの八七年の一年間は小さな世帯のわりには、それぞれが自己の能力の半分ぐらいは消化してきた一年ではなかったか。要は、さらに相互の思想や運動をいかに共有し合えるか。如何に理論化し感性にまで高められるかにあるだろう。そして、そのことが同盟として、同盟を通じて、表現しきれるかどうか、ここに同盟の飛躍があるだろう。

このことはまた、一定の量の拡大に連ならなければならない。質・内容を共有し血肉化するとも量に転化しきらねばならない。「質の量への転化、量の質への転化」そうした第一年に一九八八年はしなければならぬであろう。第一次共産主義者同盟が結成されて三〇年目である八八年は、党建設の具体的スケジュールを具体化してゆく年としなければならぬであろう。長期計画にもとずくマルクス主義の復権と数ヶ月ごとの理論合宿の計画、この計画は運動、闘争、分析と評論の均質化をおしすすめカードルをカードルたらしめる絶対不可欠の計画である。この計画は全同盟におしすすめるのみならず、できるだけ大衆的に、われわれの党派性を確認するものとしてなされるであろう。

次に『プロ通』について一定の総括をしておかねばならない。

『プロ通』はわれわれの機関紙である。とはいえずでに述べたように、機関車として前進するほどその実行力に欠けてきたのが実情である。それは単に方針の問題ではない。われわれの今日の主体的力量の問題であると同時に団結の質を物語っているのだ。主体的力量と団結の質とはひとえにわれわれの歴史性である。そうであればこそ、世界観における統一、人の要素、作風と言った事柄については、あらためて提出しているのである。われわれは、それぞれの軌跡を尊重しつつ再団結した。われわれは、それぞれをゆるぎない一個の革命家・共産主義者として信頼し合っている。われわれはこの関係を政治的社会的存在に如何に飛躍せしめるか。一切の努力はこの一点にある。そのような最も優れた手段、工業化されたものとして機関紙の役割を把えている。しかし、その実現には、それなりの手順があ

ると言うものではないだろうか。わが同盟員のすべてが、プロレタリア前衛である。全責任はそれぞれの双肩にかかっている。

何故内部通信としたか。

われわれは敗北に対してそれを一顧だにすることなく乗り越えてしまうほどの強靱な精神力をもちあわせていなかった。このことは非常に経験主義的ではあるが、自からの思想を人に訴えるだけの力として信じきれないことを意味している。われわれが指導部、カードルと自覚していたとしてもこの自覚を裏づける実力がはたしてあるのかどうか、自からを計りにかける時間が必要であった。

「本を読み、考える、そして書く」こうしたごくあたり前の仕事に習熟する時間である。練習し修行する時間である。われわれにとつて本気の勇氣とは、空元気でも、スローガン倒れになることでもなく極めて内発的な勇氣

るなら「自己解放主義」である。この一点において「自前主義」を貫徹してきたことに誇りをもつものである。われわれの政治的実践は有言実行でなければならぬ。予言者にとどまるような単なる理想主義者であってはならないであろう。つまり、われわれは、主義者なのであって、論者では断じてないのである。

一九八八年『プロ通』は一定ひらかれた同盟機関紙としてゆきたい。そのためにはこの一年間の失敗、未熟さを反省材料としなければならぬであろう。自己主張のみならず読者を十分意識した新聞づくりを心掛けなければならぬ。編集のあり方、ワリつけの仕方、題字や見出しのつけ方など仲間うちのみ通用するようなものでなく、専門分野としても他セクトに敗けない新聞でなければならぬ。見た目に奇麗で正確で一目で講読をそそるよ

でなければならぬであろう。他人に訴える力、他人を説得する力とはそれぞれの内発的な力の発露としてであり、内在する人間性ではないだろうか。真の勇氣とは権力に屈服しないこと、そんなことは百も承知なのだ。にもかかわらず何よりも精神的に敗北してきたのが「連合赤軍」を頂点とするものであり、現在なお「内ゲバ三派」はその思想において敗北しつづけている。われわれこそ、この敗北の歴史に終始符を打たなければならぬ。文章を書く、と言うことは禁欲に徹するとともに孤独なものである。禁欲と孤独を自己に果すことは、やはり重要な訓練を必要とするであろう。この一年間に十分訓練がゆきとどいたなどは考えていない。しかし、とにかくこの一年間「自前主義」を貫きとおしてきた。このことは唯一誇りうるものではないだろうか。マルクス主義とは、比論的に述べ

うな編集のあり方を勉強しなければならない。それには努力が必要であり、心をこめた編集でなければならぬ。編集のみならず印刷と経営・独立採算についても徹底的に習熟しなければ機関車になり得ないのではないか。物事には出だしがあり、その時になったらやるのではなく今目的に問われているのである。最初が重要である。印刷と経営能力、すなわち管理する能力が問われる。少数だから曖昧でよいだろう、ではなくむしろ少数であるうちに訓練し次の代にひきつぐ財産、伝統をつくりあげることではなければならぬであろう。また、最も肝心なのは全同盟員が文章を書くと言うことである。「書かせる」指導も仕事である。

われわれの求心力について述べておきたい。人を組織するとは、会議を組織すると言うことでもある。人を組織するとは、報告をし

合うと言うことでもある。ブルジョワ社会にあっては法的関係として人は組織されている。その日常は契約をなしている。しかし、われわれは任意の自主的な意志の結合として共同の目的で組織されている。共同の権利、共同の義務としてである。言葉をかえればこの共同性とは責任の分担と言うこともできる。われわれの運動は、人間の意志力、能動性、またはきわめて観念的な運動である。そこでは、その運動や組織を構成する一人ひとりの忍耐強い努力がないかぎり、遠心力の力が求心力より勝る可能性人である。それ故、政治目的、政治路線の議論、確認作業が不断に行なわれ相互の意志確認と意志の疎通を計らねばならないであろう。この「平和な時代」に、この「豊かな時代」にあって労働者人民の大義に賭ける革命的意志、それが革命党たらんとする共産主義者同盟である。

第三章 われわれの政治について

— 党派政治と全国政治について —

われわれは国際主義をどのように実現してゆくのか、社会革命の基盤をどのように構築してゆくのか、このような観点から党派政治と全国政治を見てゆかねばならない。われわれはこの点で具体的に実践的でなければならぬであろう。ブントの歴史で言うなら非常に観念的でスローガン主義であった。「自国帝国主義打倒」こそ国際主義である。これは真理である。しかし、日本帝国主義に抑圧され略奪されつづけているアジア・アフリカ、そして中南米の被抑圧民族にとって、日本帝国主義が打倒されるまで待っているわけではなく日常的にたたかっている。われわれにとって「日本帝国主義打倒」をたたかう

ことと被抑圧民族解放闘争に連帯することはともに国際主義である。同時に、世界党と言う観点からは、支援・連帯にとどまらず党的団結、世界インターを建設するということ抜きには国際主義を実現することにはならないであろう。しかし、ここでもねばり強い活動が要求されるであろう。われわれはいまだ十分そうした活動を展開しているわけではないがあらゆる機会に路線の実現に向けて準備しておかねばならない。

先ず、国内問題として、アイヌ、沖縄、在日諸民族問題に真剣に取り組むこと、このような国際主義の路線は、党の世界性と社会革命と言う点においても不可欠の政治路線でなければならぬであろう。更に、大衆的に交流されているフィリッピンにおける革命勢力、韓国における民主勢力との関係、いうまでもなく、中近東、アラブとの関係、これらはい

ずれも、他を防衛することからして非公然な組織活動となるであろう。自からの思想、自からの組織、人間関係を防衛するのみならず、他を防衛することが自らを防衛するという相互防衛としてあり、啓蒙・宣伝ということでは最も大衆的に政治は展開されなければならない。より身近には、アイヌ、沖縄、在日の解放を実践的に分析し関わらねばならない。いうまでもなく、身近とは国内少数被抑圧民族解放闘争との連帯（共闘や会議などの組織化）である。

「帝国主義打倒！プロレタリア独裁・社会主義」が戦略スローガンとすれば「万国の労働者の団結、被抑圧民族の解放」がわれわれの綱領的スローガンである。

この戦略綱領を実現する国際党の建設、これである。

世界党と言う場合、世界革命主義の立場か

ら誰を何処を指導者とし本部とするか、そうした形式より、今問われているのは、綱領と戦略のもとに日常的に工作する政治である。

われわれは抽象的に世界革命・世界党を語る時代はすぎたと考える。われわれは具体的に世界革命・世界党を実践しなければならぬ。各国の党、各民族の党が世界革命と世界党建設に向けて共同すること。「北アメリカ帝国主義打倒」をはじめ世界資本主義・帝国主義打倒とスターリン主義反対をかかげて共同すること。かかる共同行動のよびかけを先頭にたって行くとともにその連帯した運動をつくり出してゆかねばならないであろう。

全国政治について、その当初より目的的是なかつたとはいえ、鉄道産業労働者運動と少数民族独立運動支持の全国組織が今秋、あいついで結成された。この全国組織にわれわれのヘゲモニーが貫徹しているわけではない。

り発展的な運動体にしてゆかねばならないであろう。「党をつくってもらう、党に応援してもらおう」と言うことではなく、自からを党派たらしめる。同時に党をつくるのである。かかる意味においてわれわれは、論者と決定的に異なるのであり、言行一致・有言実行者としての主義者なのである。つまり、主体性主義者であり、「自己実現主義」なのである。次のようにいいかえることもできる。すなわち、世界観と生き方・人生観と分離するような評論家・論者と決定的に異なるのだと。

われわれは、これまで「三里塚に緑の大地を！労働者市民連絡会議」「東京・天皇制を考える会」で活動してきた。この二つの名称の下に結集しこの三ヶ年間活動してきた。三里塚の位置づけ、天皇論を展開しようとするのではない。一個のセクト、グループとして一定の分析と方針に言及しようとするもの

しかし、その意義は重大である。この全国組織を是非まもり育ててゆかねばならない。この全国組織にわれわれの運命をたくすことも、展開するものでもない。だが、全国を具体的に分析し論じることの足がかりを得たことは事実であり、労働者運動と人権擁護を基本とする市民運動両面から全国に眼を向けることができたという点で画期的である。

鉄道産業労働者運動においては、極めて主体的反省にたつて結成された。たとえば「本工主義・一家主義の解体、差別被差別への無自覚と克服」。また、少数民族問題においては、国際的支援組織との連帯が取り組まれようとしている。

われわれは、目的的是なかつたとはいえ、この全国組織に積極的に関わる以上、そこでの主体的同盟建設、細胞の組織化を通じてよである。

われわれは全くの小セクトであり、グループである。しかし、この名称のもとにそれぞれの想いを込めながらそれぞれの関係を組織し表現してきた。そのことは好むと好まざるに関わらず、すでに一個のセクト、グループと見なし、見なされてきた。われわれはこのことをしっかりと自覚しなければならぬ。とはいえ、これら名称の示すところはあくまで、市民的な大衆組織であり、課題別大衆組織である。つまり、人民の革命権を行使する結社ではなく人民の抵抗を示す大衆組織・結社なのだと言うことである。また、党派政治（のろし）、プロ行動委（火花）、反帝戦線（ブント諸派）などと言った党組織の名称替えのようなものでもない。

われわれはこの三年間の成果を踏まえて徹

底した宣伝戦に打って出なければならぬ。
より大量により工業化された大衆組織とする
ために。全国組織と党派政治を展開し国内少
数民族会議（仮）の提唱と太平洋・アジア諸
民族会議（仮）を組織する展望のもとに一致
団結しようではないか。

三里塚芝山農民の空港反対闘争を支援する
とともに三里塚がもっている大衆闘争の歴史
性、全国性を十分理解し断固として二期工事
阻止闘争に決起してゆかねばならないであら
う。

天皇制は廃止されなければならない。天皇
制は単にイデオロギーではなくひとつの制度
である。原因が国民統合のイデオロギーとし
ても働くのである。これが日本における特殊
性である。部落解放同盟の父と言われる松本
治一郎は「貴族あれば賤族あり」として天皇
制の廃止をあの治安維持法下で主張した。ま

た「人間解放なくして部落解放なし」とし、
部落解放を人間の解放と結びつけ、それは天
皇制の廃止にとどまることなく明確にプロレ
タリア世界を展望していたのである。われわ
れも天皇制の廃止は、天皇制を必要とする社
会の転覆において実現するであろうことを展
望してたたかうのである。

この三年間（とりわけ昨年同盟総会后）
われわれは勝利的に運動を前進させてきた。
三里塚の選択、今次沖繩闘争での公然たる
登場、そして全国組織の形成。こうした成果
を更に全国党建設としなければならぬ。全
国党建設に邁進しよう。

統一戦線・党派間共闘についての経過・一
定の総括をしておかねばならないであろう。
統一戦線と言う場合、労農同とか、民族民
主統一戦線と規定しているものではない。いま
だそこまでの運動も実践も経験していない。

むしろ今日的には、ひとつの政治潮流をどの
ように形成するのか。ひとつの政治的傾向を
どのようにしたら代表できるのか。一切の活
動はここにある。

ひとつにはブント建設であり、ブントの共
闘であり、ブントたらんとすることである。
ではどのようなブントなのか、それは大きく
は、「12・18ブント」の系譜であり、大衆的
実力闘争の系譜であり、ヘルメット政治に限
定しない政治である。第二に、あの連合赤軍
問題をどこまでも真摯に総括しトコトン被差
別大衆を味方とする政治の形成である。「被
差別共闘」の利害を代表しようような労働者
組織の形成として革命党を建設する。そのよ
うなセクト、グループとしての共闘を目ざす
ものとして今日的共闘はあるだろう。第三に、
結論的に「ブントの左派」共闘である。

三者共闘「連続講座運営委員会」は、以上

三点の目標のもとに結成されたわけではない。
むしろこれから、以上三点について我々の努
力が必要であり、我々は独自にかかる位置づ
け、目標のもとに全国共闘につくり上げてゆ
かねばならないであろう。この共闘を利用し
つくすこと、全国化する展望を独自にもつこ
とでなければならぬであろう。全国的な大
衆闘争機関の創出は我々の全国組織建設と一
体であり、我々が牽引することをおしての
み共闘は持続するのである。

「連続講座運営委員会」は、セクト間の課
題別共闘である。

ひとつにはこの共闘を他グループに呼びか
ける。具体的には街頭闘争共闘として、三里
塚、反天皇、沖繩、国家機密法反対、精神衛
生法反対など労働者行動委員会と位置づける。
街頭闘争とかぎりではひとつの強固な隊
列を形成しようなたたかいでなければならぬ。

らないであろう。

第二に、在日沖繩、琉球人運動、アイヌ民族解放運動を支持、支援するとともに独自に政治組織工作をする段階にある。すでに述べたように、国内少数民族会議を具体化するためには、自からの内容を提起し組織してゆかねばならないであろう。推進する母体、牽引する組織の建設、このことはよりグローバルにこの日本資本主義の階級分析をすれば、いまやアジア、アフリカの労働者がごく底辺の労働力を支えている。このことは、ごく自然に排外主義を生む上壤を全社会的に形成している。女性が中心に働きにきているのみならず、土木、建築、町工場など単純肉体労働者となつて、在日を余儀なくされている新植民地主義の犠牲者がすでに十数万になろうとしている。このことは、日本人とその労働者に排外主義を醸成させる。こうした、在日底賃金

底賃金労働者である。いうまでもなく、たまたう農漁民である。こうした人々、労働者人民を味方とする労働者運動、労働組合運動でなければならぬであろう。

われわれは、この点でも独自の独特の政治を形成し、行うことによってプロレタリア独裁の基礎をうちかためてゆかねばならないのである。

われわれの政治組織路線・戦術について、『プロ通』（9号）において一定明らかにしておいた。われわれはわれわれの政治を、運動の典型をつくり出すであろうが、しかし、そのことによつてすべてを規定するのではなく、ひとつの管制高地としてそれを手本とするのである。したがって、政治組織路線とはあくまでも主体形成である。今日的にはそれはわれわれの戦術でなければならぬ。だが、単に技術ではなく、自から唯物史観を獲

労働者との連帯をつくりだすためにも、共産主義者の政治工作はとりあえず、国内少数民族の組織化としてかちとられなければならない。いうまでもなく、在日朝鮮人を中心とするたたかいを支持、支援し太平洋アジア諸民族解放・日本帝国主義打倒闘争とともにたたかう。ここに、太平洋アジア諸民族会議は、早急に組織されなければならないのである。

以上のような政治目的の実現のため、その第一歩として、この数年間の活動を踏まえ、アイヌと沖繩、琉球人の組織化は急務なのである。

第三に「人民の友とは誰か」「労働者が味方にするべき人民とは誰か」ということである。それは被差別大衆であり人民である。

障害者、身体的精神的ハンディーキャップをもつ人々、老人、女性、被差別部落大衆、そして、国内少数民族、在日諸民族であり、

得するところの本質的意味をもっているのだ。いかえれば、大衆闘争とは、直接民主主義の要求であり、階級の階級意識の形成である。この大衆闘争・運動と不可分密接に結びついてはいるが党の建設は全く別個のものである。何故なら、共産主義者は、階級闘争にはじまる全世界の獲得を任務としているからである。したがって、われわれの政治組織路線、政治とは主体形成にほかならないのである。

一九八七年十月

〒170-91
豊島郵便局私書箱59号
アジア政治経済研究所

